

樹木と向き合った人

日本画家 平川敏夫

豊川市立小坂井東小学校長 中嶋 桂

故郷に残した足跡



豊川市文化会館大ホール緞帳(原画は表紙の『萬華松韻』)

小坂井東小学校の校長室には、横幅約1・5メートルの絵画『水草と家』が飾られています。校区出身の日本画家、平川敏夫(1924〜2006)の初期の作品です。

同じく、母校にあたる小坂井中学校では、平成の前半に「渥美半島40キロ歩行」が毎年行われていました。2年生全員が半島先端の日出の石門を夜明け前に出発して、雄大な日の出の感動を胸に表浜を歩き通す立志行事です。この行事は、時の多田祐一郎校長が、渥美浜を描いた平川敏夫の墨画から着想を得て立ち上げたものです。また、旧宝飯郡小坂井町では、昭和



『水草と家』(1955年/小坂井東小学校所蔵)

40年から昭和末まで、新成人一人一人に記念品として平川敏夫の『岩割の松』の絵皿が贈られていました。

平川敏夫が残した数多くの絵画は、東三河を中心に全国各地で所蔵されています。美術館はもとより市役所や病院など、様々な施設で目にする事ができます。豊川市文化会館大ホールの緞帳や豊川市小坂井文化会館(フロイデンホール)の緞帳も、平川敏夫の原画によるものです。

作品展も国内外の各地で催されてきました。近年の大きな作品展としては、2004年の秋に浜松市秋野不矩美術館で開催された「浜名湖花博開催記念 平川敏夫が描く自然の美展」が記憶に新しいところです。

この頃から見られる独自の墨画は、平川敏夫の代名詞ともいえる白抜きの技法によるものであり、その作風は清閑かつ幽玄な境地に至りました。

平川敏夫の言葉

60代の円熟期を迎えた平川画伯は、小坂井中学校の研修会に招かれたことがあります。作務衣姿で職員の前立った画伯は、穏やかな語り口で半生を振り返りました。

少年期に厳しい徒弟生活を経験したこと、修業時代にはひたすら先人の絵を模写して画家としての基礎ができたことなど、昔はそれらが当たり前だったという話がありました。肝心の白抜き技法については、「これは企業秘密ですが」と微笑みながら、アラビアゴムを使って染め抜きを施し、さらに薄墨を重ねていくという手順を説明してくださいました。

平川画伯が終生めざしたことは、「無色になるまで描きたい」という言葉に凝縮されています。時代順に作品を眺めていくと、不要な色と形を排して、本当に描きたいものをひたむきに追い求めた業から、一步一步目標に近づいていったことが分かります。

画家になるまでの歩み

大正13年に生まれた平川敏夫は、小坂井尋常高等小学校を卒業後、16歳のときに故郷を離れ、京都の着尺図案塾に住み込みで入門をしました。活発だった幼少期に足を傷めていたことから進学を断念し、「しよがな。俺一人でもやるぞ」と奮起して選んだ道です。徒弟生活を通して、日本画の基礎と忍耐強さを身に付けました。昭和16年、太平洋戦争が始まったため帰郷しましたが、戦争が起きずに京都にとどまっていたら、あるいは違った人生を歩んだのかもしれない。戦時中に県の農林技手になり、終戦後23歳で退職、結婚を機に、いよいよ画業に打ち込むようになります。

以前から中村正義、星野眞吾と交流があり、ほどなく中村の勧めで出品した第3回創造美術展で初入選を果たすと、その後も、新しい日本画をめざす美術展で入選を重ねていきました。

途中25歳のときには、中村と星野が豊橋で開いた「中日美術教室」に大森運夫、高畑郁子とともに加わっています。ご長男に何うと、当時は、自宅で小学生を教えたり、写生会に付き添ったりしたこともあったそうです。

画伯自身による画集のあとがきに、次のような一節がありました。

「老樹は、先人達との語らいを秘め、過ぎし歴史の物語を思いおこし、人間社会の平和を願う。混濁と不調和の世の流れを憂う」

長年にわたり樹木と向き合った平川敏夫は、私たちが生きていく今の世の中をどう見つめているのでしょうか。



『池畔』(1975年/豊川市桜ヶ丘ミュージアム所蔵)

独力で切り拓いた道

平川敏夫は、多くの友人と関わる一方、師弟関係をもたない独学の道を行んでいきました。初期には風景を多く描き、素朴な幻想をたたえた作風に特徴が見られます。

その後、34歳のときに伊勢湾台風の被害を目の当たりにした経験がひとつの転機になりました。海に迫った断崖が無残にえぐられ、海水をかぶって白骨のように見えた防砂林が、それでも力強く生命を保っている有様に感銘を受けたからです。それからは、様々な樹木の姿に、自然がもつ計り知れない生命の力を見出し、いきました。

加えて、36歳のときに画家たちと出かけたヨーロッパ旅行が墨画を追究するきっかけになりました。日本画ならではの素材を生かし切った仕事こそ世界に通用するのではないかと、できるだけ色を取り去ってやれないものかと考えるようになったのです。

このような契機を経て、作品の色調は次第に絞られていきました。北海道で取材をして描いた『樹淵』は「静まりかえった黒い淵の中から、生きていくものへの話し声が聞こえる」と感じ、た心を表現しています。



『樹淵』(1963年/豊橋市美術博物館所蔵)

【写真提供】豊川市桜ヶ丘ミュージアム

豊橋市美術博物館、豊川市文化会館

【参考文献】「小坂井町誌 通史編」

「画集 平川敏夫」(京都書院)

「平川敏夫展」(中日新聞社・東海テレビ放送)